

### (三) 学園在職者

#### 昭和三十年年代の変動

小田 正彦

私が本学園に奉職したのは昭和三十二年四月である。当時学校は可部駅の近くで、現在国道五十四号線が通っている位置である。校舎は、木造平屋二棟、木造二階建て一棟に、狭い校庭があつた。生徒数も二百名余り、開校まもない高校に、元からの女子専門学校（二年制）それに併設の師範科（和洋裁が主）で生徒の年齢も十四、五歳から二十歳位までの生徒で占められていた。このような組織の中に、私は理科の新米教師として教壇に立ったのである。

ところが、四月末に火災が発生し、二階棟の校舎を焼失

した。高校開設当初でもあり全員の気が張りつめていたのだろう、誰一人生徒も職員も泣き事をいうことなく学園長先生の言葉の「無から有を生む」の信念のもとに、授業も中止することなく、生徒・職員また父兄の方々を加え、現場の復旧に取り組んだその結果が、今日の武田学園の隆盛をもたらしたといつても過言ではない。この火災が中島校地への移転計画を早めた。すなわち、現在の安佐市民病院の場所に、学校建設が行われたのである。

この中島校地では、広島県可部女子高校、可部女子専門学校、さらに可部女子短大の三校名をかかげた。短大開校と同時に、高校名も可部女子短大附属高校と変わり、飛躍的に発展したのである。生徒数も千百余名と増加し、真に目まぐるしい時代であつた。

三十年代から四十年代当初まで、可部女子高校、また短大付属校でありながら、創立当初の校名『可部女専』の馴染みか、いつも「可部女専」とか「可部女専の生徒」というように呼ばれていた。しかし、この時代の生徒たちが、今、子育ての真最中である。学園長先生の言われた忍苦の精神は、家庭生活にも生かされていることだろう。当時は、学校の基礎を作ることに精一杯の時代であった。日々の指導には「無から有を生む」、生徒の躰は「形から心を」、そして生徒には、「努力」、努力には花が咲き実を結ぶ」を終始力説された。「礼儀正しい生徒さんですネ。」「骨身を惜しまずよく働いてくれます。」「素直ですネ。」「これが生徒の就職先の上司から聞かされる言葉であった。手箕一杯の砂利や石を根の谷川から運んで運動場を拡張、竹の根を掘り上げ土地を均し、その地に寄宿舎の建設、通学路の整備などを行った。生徒も授業後には奉仕した。職員も手伝った。学園が一丸となって協力した時代である。

当時の生徒の出身は、県下全域及び山口県からなどで

あった。職員は二学期に入ると、生徒募集のために県内の中学校を訪問した。奉職間もない先生方も、一人一人が学園の発展、私学独自の校風を創ることに努力した。三十七年に短大が開設された。ちょうどこの頃は県下の女子の半数近くが短大に進学を希望するようになったころである。高校も短大附属高校と改め、進学指導も考えられるようになった。進学者も徐々に増加して来た。そこで短大開設と同時に普通科を設置し、総合的な高校として活況を呈してきた。

三十年代に入学・卒業していった生徒たちが、自分の子供たちを本学園に入学させるまでになった。私も二十数年在職、当時とは全く生徒の考え方も変わり、同時に社会の実情も急変してきている。しかし、学園の教育方針はゆるぐことなく今日も生かされており、それを基盤に今日の時代に即応しながらいよいよ発展し、社会の期待にそえる人材を育成する教育を進めていかななくては、日々精進努力している次第である。

(広島文教女子大学付属高等学校教諭)

## クラブ活動を通して

松島 哲也

私が社会科の教師として本校に奉職したのは、昭和三十六年四月であった。

この年は、高等学校が開校されて五年目で、生徒数も漸次増加している頃であった。当時の可部町は、山の緑が美しく、古い家並みが続き、町の中を根の谷川がゆったりと流れていた。横川から五十四号線を通る乗合バスが、砂塵を巻きあげ、狭い旧道を四十分もかかって可部まで走っていた。

学校は、中島の校地に木造二階建て校舎と平屋建ての特別校舎があり、根の谷川沿いに寄宿舎が三棟並び、その横に学園長先生の質素な住宅があった。特別校舎に並行して、鉄筋三階建ての本館が工事中で、この年の秋、白亜の校舎が竣工した。横川から五十四号線沿線で、鉄筋三階の建物は本校の本館だけで、国道を往来する人々

の眼をひいたものである。当時としては、画期的な建造物であった。生徒は礼儀正しく、全員が気持ちの良い挨拶をしてくれ、躰け教育の徹底した学校であった。

新学期が始まって、バスケットボールの顧問にあてられた。バレーボールは県内でベスト三に入る実力で、中前孝先生が熱心に指導しておられた。その他にソフトボール部、卓球部などのクラブが熱心に活動していた。本館と淳風寮との間に田圃があり、当時は寮側の半分が埋立てられ、グラウンドになっていた。本館側の田圃は、春に職員・生徒で田植えをし、秋には稲刈りをするなど、農作業に精を出した。グラウンドからボールが田圃の中に飛び込み、生徒がトレーパンのすそをあげて、田圃の中を探しまわる姿が印象的であった。

さて、バスケットボール部の顧問を引き受けたものの、戦後の物のない時代に育ったため教わったこともなく、試合を見たこともなく、全くの素人で大いに戸惑った。出広というマネージャーがいて、放課後には教官室に迎えに来るので、行かないわけにいかず、毎日コート

に出るはめになった。五月中旬、県の総合体育大会と全国高校選手権大会を兼ねた地区予選が、広大東雲分校の体育館で開かれた。舟入高校と対戦し、大差で敗退した。生徒は号泣し、悔しがった。この光景が実に奇異に感じられ、生徒の気持ちを理解するのに苦しんだ。

高校が開校された当初、体育の先生が中心になって体育系のクラブがつくられたそうである。バレーボール部をつくられたのは藤原先生（現呉市内中学勤務）で、その後を小田・中前先生が育成され、中国高校選手権に毎年県代表として出場していた。バスケットボール部は、植村先生が三年計画で優勝をめざして結成されたと聞いている。植村先生は、バスケットの専門家で、日本公認審判員だったそうである。当時の広島県には、公認を持つ審判員は、そうたくさんはいなかったと思う。常石鉄工所からバスケットのリングを寄贈していただき、寮の前にグラウンドをつくり、アウトドアで練習していた。部を結成された植村先生は一年間で退職された。泉谷先生が二年目を指導されたが都合でおやめになり、

三年計画の三年目を素人の私が顧問になったわけである。生徒の目標は、優勝することであり、その夢が実現されなかった。先の試合で大差で敗れ、悔し涙を流したのは、そのためであることが後日わかった。

若かった私は、このような生徒の純真でひたむきな態度に感動し、教えられるものがあつた。三年生は、自分たちの果たせなかつた夢を後輩に託し、私にも優勝するまでがんばってほしいといい残して卒業していった。何とか生徒の夢をかなえてやりたいと思つた。三年計画を立てるなど、バスケットボールの研究に精を出した。練習を充実させ、技術を向上させるためには、選手経験のあるコーチをお願いしようと方々を探したが、なかなか見つからなかつた。そんな時、中前先生の紹介で、大和重工の水戸さんにコーチをお願いすることができた。

昭和三十七年、生徒数も増加し、田圃を埋めてグラウンドを拡張することになった。水はけの悪い低地なので、下に川石を敷き、上にまさ土を入れて整地する計画であつた。裏の根の谷川の河原の小石を、職員と全校生徒の

勤勞奉仕で運搬することになった。授業を短縮し、生徒は手箕や風呂敷に小石を包み、蟻の如くまさに人海戦術でこの工事に協力した。男子職員は、学校の中型トラックとポンコツの軽トラックで運搬し、二週間で約五十センチの厚みに小石を敷きつめることができた。その上にまさが入り、ブルドーザーで整地され待望のグラウンドが完成した。感激一入であった。川土手より根の谷川を望むと、約三百メートルにわたり河原の石ころはなくなり、人間の力の結集の偉大さを体験した。

こうして、グラウンドも整備され、広くなったグラウンドでクラブ活動も盛んになっていった。グラウンドの隅に設けられたバスケットコートがいつもきれいに整備されるようになった。練習は、お盆と正月に三日間休むだけであった。冬期になると朝五時に起床して、コート上の雪を掃き、寮に在る選手と焚火を石油缶にいれ、コートの上において凍みを解かし、放課後の練習にそなえた。選手も実に良く練習に励んだ。五年後（昭和四十年）には、全国高校選手権長崎大会に県代表として出場することが

できた。生徒との約束がいに果たしたのであった。

この年珠算部が中部日本大会に県代表として出場した。珠算部は、昭和三十四年商業科新設と同時に結成された。熱心に指導しておられた島本正則先生のスパルタ指導がみのり、以後八年連続で全国大会に出場した。昭和四十八・九年がピークで、九段の本田、竹野、杉本をはじめ、ほとんどの部員が有段者で占める層の厚さで、商業学校を制圧しての活躍は立派であった。文化系クラブの中にも、タイプ部が全国大会に出場したり、茶道部が茶会を開いたり、手芸部が夏休暇に合宿して日本ししゅうを完成したり、生徒と教師が一体となり、活発に活動していた。

次の年、長い間優勝への壁が破れなかったバレー部が県代表として、秋田で開かれた全国高校選手権大会に出場した。全国的にもハイレベルの県内で、伝統校を倒しての出場は立派であった。四十年代前半は、ソフトボール部、弓道部、テニス部の活躍もめざましく、多くの選手が、団体・個人で中国高校選手権大会、全国高校選手権大会

に出場し、輝かしい記録を残した。この時期は『武田』というチーム名で対外試合に出場し、躍進の時代であった。三十年代後半から四十年代前半は、クラブ活動を通して教師と生徒が一体となり、心身の錬磨をはかり、学園が大きく前進した良き時代であった。

(広島文教女子大学付属高等学校教頭)

## 昭和四十年頃

小川 登

私が本学に赴任したのは、本学がまだ可部女子短期大学という名称のころであった、昭和三十九年四月のことである。被服学科がスタートしてまだ三年目で、その上、その四月に食物栄養学科の一期生を迎えるというあわただしい雰囲気の中での着任であった。私学の草創の時は、どこでもその存在を社会に周知させることがどうしても必要であり、私も着任早々の新人ながら、各方面への広報活動に東奔西走することになった。

あの頃の広報活動についての思い出を語るとなれば、尽きることもない程に数多くの思い出があるが、その一つを書いて見よう。ある冬の日の夕方、事務局のY君の運転する車で、賀茂郡への出張から帰る途中、Y君が積雪にハンドルを取られて、車が急に道路の右側に向きを変えて直進した。助手席で見ている、車が勝手に右へ走ったというそんな感じであった。幸い右側が田んぼや川でなく山の斜面であって、これに車の正面がぶつかって、加えてその斜面が軟らかい土肌だったおかげで、ケガは免がれたが、瞬間肝を冷やした。そうしてすぐには車が動かず、通りがかりの車の人の助けを借りて、あれこれ苦労を重ねて、漸く帰路についた。さらに八本松あたりまで帰ったところで修理店に立ち寄らねばならなかったりして、可部に帰れたのは夜の九時頃であった。今となつては、これもその時のY君のあわて振りと一緒に思い出す懐かしい追懐の一つになったが、あの時はほんとにヒヤッとした。

次に思い出すのは、同僚の有川先生のことである。有

川先生は、私の着任の時、学園全体の事務局長と短期大学の美術の講師とを兼ねておられた。先生が学園に入られたのは私より二年早いだけだが、短期大学が創設されたのと同じ昭和三十七年四月で、しかも今の附属高校の前身である広島県可部女子高校が誕生してまだ漸く六年目であった。加えて三十九年四月に短期大学の食物栄養学科の創設、四十年四月には短期大学の国文・英文両学科の開設と続く時期に当たり、短期大学と高等学校の両方の事務を一手に引き受けておられた。当時の事務局は、極めて繁忙であった（この頃の事務局の多忙な有様については、有川先生と苦勞を共にされた現西沢教務課長がよく承知されている）。そのような状況の中での講師兼務の事務局長であったから、その多忙さは推して知るべしである。私が時々午後の七時頃まで居残りをして下校する際にも、先生が旧中島校舎の事務室で忙しく立ち働いておられるのをたびたび見かけたのが、昨日のことのように思いおこされる。

有川先生は温厚で他人と争うことを好まれません、謙虚を

地でゆくような腰の低い人であった。そしてこのような多忙の中で、講義の方も、当然のことはいえ決して手を抜くことなく、誠実に遂行しておられた。私は前述した広報活動のために先生と一緒に出張したことも二、三回あるのだが、そのような折に先生の多忙な毎日にはいろいろな言葉を呈上したところ、「いやあ、これくらいは何でもありません。前任の中学校長の頃は、町村の教育委員会との折衝で、もっともっと苦勞しました。」という思わぬ返事が返ってきた（先生は本学へ赴任されるまで広島県の賀茂郡のいくつかの中学校の校長を歴任された）のが、今も私の脳裏に強い印象となって残っている。

先生は事務局に三年おられたあと、昭和四十年の四月に事務局長の仕事が解かれて、講師の職務に専念されることとなった。形象派美術協会に所属する根っからの画人であり、昭和三十二年以来、広島県の中学校造形教育連盟の理事でもあられた先生は、このことを随分喜んでおられ、名古屋の方で開かれた個展の批評が新聞に載っ

たりしたのも、それからまもなくのことであった。しかし残念なことに、先生が教育と画業とに専念する喜びにひたられたのは、それからほんのわずかな時間であった。昭和四十二年の十一月、食道癌の診断で広島大学の附属病院に手術のため入られたと思ったら、冬が過ぎたばかりの四月には、卒然とあの世へ旅立たれてしまわれた。あつという間にといい形容があるが、かけねなしにそのような感じで遠くへ行ってしまうされた。

先生が学園に勤務された時間は、五年半ということですが長い年月ではないが、先生はその間、本学の教職員としてのお仕事に文字通り尽瘁されたというのが、同様としての私の印象である。先生が亡くなられて、早くも十五年が経過した。その間の学園の目覚ましい発展を、先生はきつと草葉のかけで心から祝福されておられることと信ずる。先生の御冥福を切に祈りながら筆を擱く。

(広島文教女子大学教授・英文学科)

「よくぞ、これまで……」

豊後孝江

「よくぞ、これまで……」。私の思い出は、この一語に尽きる。これは、大学の施設・設備、学生の数・内容も、また自分自身をも含めた感慨である。

昭和三十九年、食物栄養科増設にあたり、可部女子短期大学助手として採用され、現在に至っている。学園創立三十五周年にして、食物栄養科も二十年目を迎え、私も人生の約半分をこの学園と共に生きてきたことになる。いつか文教通信に書いたことがあるが、採用されるにあたり、家庭の事情や、家から遠いことで躊躇したが、朝は授業に間に合うように、授業が終れば帰ってよいかからと、出崎先生に誘われて決心した。しかし、仕事というものはそんな訳にはいかず、いわんや学生の指導ということとは、なまやさしいものではなかった。途中、母のたびたびの病氣、出産、父の死、また実姉や母の死



等々、思い出せば「よくぞ、これまで……」と思うのである。

昭和三十七年から四十四年まで、短大は現在の安佐市民病院の敷地に、高校と同居していた。当時、高校生の数は多かったが、短大の学生および教官の数は少なく、さらに、短大の設置は高校が基盤であると聞くことたびたびなので、なんとなく肩身の狭い思いがしていた。しかし、この時のこの気持ちがあつたればこそ、なんとか大きく充実した大学にしなければ、また大学の教官ならば研究しなければと、必死になつたのかもしれない。翌年、国文科・英文科が増設されたものの、規模が小さいことには変わりなく、毎週一・二回は夕方遅くまで会議があつた。この頃の習慣で、今もつてわが家では「今日は会議よ。」という、帰りが遅くなると思ひ込んでいる位である。当時の会議は、実に小人数で家庭的で、ちょうど今の学長室の三分の二位の部屋で、ニキビの数までわかる位だったから、現在の会議の席や様子を考えると、「よくぞ、これまで……」と思うのである。

開学当初は、あまり世に知られていなかったから、今よりも別の意味で、広報活動は大変であつた。教官数が少ないので、当時、私も学生募集に方々へついで行つた。今ほど自動車も普及していなかったから、ほとんど一校、一校、汽車や電車またはバスで行つた。特に思い出す一つは、三十センチ以上も積もつた雪の中を、新庄高校を訪問した日のことで、本気で話を聞いてもらえなかつた心の寒さは、外気の寒さ以上に随分身に滲みみた。小川先生と呉方面に行つた時は、広高校の門を出る頃、すでに夕暮れも押し迫り、説明しても手ごたえのない悲しさに、なんとしても、こんなに一人一人集めるようなことをしなくてもいいようにがんばらねばと語り合つたことは、忘れることができない。これまでも、いや現在でも、多くの先生方も同じ気持ちになられることであろうが、入学試験を一次のみに踏み切つた今とは、また別の感があつたように思え、そして今、「よくぞ、これまで……」と思ひ、再びそうなつてはいけないのだと思うのである。

昭和四十一年の文学部設置に伴い、可部女子短期大学から広島文教女子大学に校名を変更するにあたって、どういう学校名にするかと皆でいろいろ話し合った時の事が、つい昨日のように思い出される。当時の短大生は、中島と上原校舎を使用し、上原で講義がある時は、短い休み時間中に上履きを持ち、今にも落ちそうな土橋を渡り、狭い草土手を土煙りをあげて走って移動した。今の学生がそんな事をするだろうか。今はもう、あの橋も土手もなく、立派になっている。昭和三十九年から四十一年頃まで、出勤簿は学長室に置いてあった。毎朝「おはようございます。」と印を押し、帰りは「おやすみなさい。」と挨拶に行った。学長先生の姿が見える日の、胸がキューンと引き締ったあの気持ちが懐かしい。学生も教官も、純情であったのだろうか。また、実習用材料が入っていたダンボールやビン・缶を、リヤカーに積んで廃品回収業者に売りに行ったこと、その売り上げ金は微々たるものであったが、今、この学舎の基礎の一つ一つになっていると、自負している。一つ一つ思い出して

みると、苦しみもなつかしく、また「よくぞ、これまで……」と思えるのである。

大学も大きければ大きいにこしたことはないが、小さい時もそれなりに良い点があったように思う。あれこれ思い出すうちに、改めて「よくぞ、これまで……」と思うと同時に、これからもさらにさらに充実発展させなければならぬ、と思うのである。

(広島文教女子大学短期大学教授・食物栄養学科)

### 揺らん期のこと

中川 厚 武

文学部が創設された昭和四十一年頃、大学の校舎は上原と中島に分かれていた。上原では文学部および短大部の国文学科と英文学科、中島では短大部の他の学科の授業が行われていた。

古い上原橋が危っかしくかかった根の谷川は改修前で、低い土手は草がぼうぼうと生え、採石場から来るト

ラックは渡河して下流の反対側の土手を登っていた。山肌に見える採石の傷あととは小さく、団地もまだなかった頃の上原の山の美しい姿が脳裏に浮かんでくる。

狭い土手道を辿っていくと、まだ本館のみの上原校舎が、桑畑、荒地、山林、川に囲まれ、人家から遠く離れてぼつねんと見えてきた。中島校舎の賑わいに比べて、上原校舎は山ふところに抱かれた別天地であった。玄關のちようど前の所に、地主の一人が売却を拒んでいるとかで、いまだに学園の所有にならない数十平方メートルの長方形の区画があり、雑草が繁茂していた。文学部は一期生のみであったから学生の姿はちらほらで、現在事務局のある所はピロティになっており、風通しはいいし、寂しい雰囲気さえあった。

研究室は、英文学科の四階、国文学科の三階は今に変わらないが、事務局は二階にあった。図書館は現在の会議室に仮り住まいをしていた。英文学関係の図書についていえば、当時はまだ洋書の入手は容易でなく、代表的作家の作品すら探すのに骨が折れた。ところが思ってい

た以上に各時代の基本的な原書が集められており嬉しかったことを憶えている。

会議室としては、学長室が衝立で仕切られて用いられていた。教授会は、大きな木製テーブルを囲んで、大家族くらいの人数で膝をまじえての相談会といった趣きがあった。思えば、その頃の古川、浅地、尾崎、山根、竹吉、有川の諸先生、安達事務局長は今はなく、辞任の方々もあり、残ったメンバーは数名にすぎない。

当時、冬期の暖房は石油ストーブが用いられ、火災予防には気をつかった。現在ボイラー室になっている所は、一部物置きとして使用されていたが、なお、卓球台を置く余地があった。学生も混じえて、休憩時間に汗を流してラケットを振ったものである。それがやがて今日のテニスやソフト・ボールにとって代わられた。スポーツといえば、広島地区女子大学交歓競技大会が忘れられない。毎年初夏に、県内の九大学が競技と応援のために県立体育館に集まって盛大であった。本学は特にバスケット・ボールが強く、優勝した時は、皆大いに感激し

た。

発足当初、設備が何かと不十分であったのはやむを得ない。その中で、ランゲージ・ラボラトリーは英文学科の自慢であった。最新の機器を備え、五十のブースが並び、学生は嬉々として利用した。生きた英語を学ぶための外人講師の獲得にも力を注ぎ、広島大学からメイキン先生や、ランド先生などに来てもらった。教育のために、特に人材の確保に力を入れる方針は今日まで変わらない。

(広島文教女子大学教授・英文学科)

## 回想十六年

山 田 敏 雄

十六年間にはいろいろなことがあった。私が本学に勤めたのは昭和四十二年四月であったが、最初の二か年は、庶務課長兼学生課長であり、短大の家庭工作と附属高校の美術を担当した。しかも二年目には被服科のデザ

インも指導したので非常に多忙であった。

三年目からは授業に専念できるようになり、学級も担任したりして今日に至っている。過去十五年の教師生活中、最も安定した生活であったと思っている。もちろん学長始め上司・同僚の指導協力と、心優しい学生に囲まれていたからだと感謝しているのである。

有川武夫先生は私を本学に紹介くださった恩人であるが、共に仕事を始めて僅か一年で他界された。温厚篤実で、教育に対しても熱心であり、図画工作の実技にも優れた先生であったのに、還暦を迎えた直後亡くなられたのは実に残念なことであった。

昭和四十五年幼児教育学科の発足により、光岡始、福井芳郎先生と研究室を共にするようになった。光岡先生は本学の名誉教授であり、八十一歳を超えられた現在も、画業や俳句に専念されている。在職十二年間、一度として立腹された顔を見たことのないほど円満な人柄であり、学習指導にも専念されたから、教え子は今に至っても先生を慕っている。福井先生は、四年三か月本学に

在任されたが、原爆症が原因で病氣退職され、昭和四十九年十一月に死去された。六十二歳であった。広島県画壇の重鎮として永年制作を続けられ、今もその遺作は県立美術館に保存されている。私はこのような立派な先生と共に仕事をしてきたことを本当に嬉しく思っている。

幼児教育学科発足以来、施設・設備の充実に努めた甲斐があつて、日常の授業には困らない内容に整えることができたのは、理事長のご理解と前記諸先生の協力の結果である。初等教育学科創設に伴い、河相優先生を迎え、新進の寺戸史子先生と三人が仲よく楽しく勤めている毎日である。

在職中、担任学級を五回卒業させたが、苦労も多かった。学生との親密感や教室の授業では得られないものがあった。教師としての楽しみと喜びをつくづく味わたつたのである。

教育の荒廃が叫ばれている現在、教師養成の任に当たっている私共の責任も重大である。現場に役立つ実力を十分つけると共に、単なる知識・技術の伝達に終わるの

でなく、心から子供を愛し教育に精進する人物を育成することに苦心しているというのが、偽わらぬ心境であつて、今後とも馬に鞭撻して努力しようと決意しているのである。

(広島文教女子大学短期大学部教授・幼児教育学科)

## 短大国文科発足のころ

大下 博子

「光陰矢の如し」といいますが、最近とみに身にしみて感じられます。

今から十七年前の昭和四十年四月、可部女子短期大学国文科(現在の短期大学部国文学科)が発足しました。入学式には、第一回生として入学した四十二名の学生が列席しましたが、その新生たちと同じように、私も不安と期待でひどく緊張していました。なにしろ私も新任だったのです。

その春は、何かと忙しい日々でしたが、学生たちも、

私も、張切ってきびきびとしていたように思います。歳月が美化してくれたのかもしれませんが、私の担任した国文科一回生のクラスは、素直で気持ちのよい人が揃っていました。何事にもよく気が合って、楽しく学校生活を送ることができました。二年生の時には、卒業レポートや就職のことでいろいろと相談も受け、私も若かったので、思案に余ったこともありましたが……。

当時は、こんな事もありました。毎日講義開始時刻少し前になると、非常勤の先生のところへ、日直の人がお迎えに行きます。そして、教室へご案内して授業が始まるのでした。黒のスーツに白のブラウス、白い上ばきが制服なのは、今と同じですが、その上ばきの白さが特に印象的でした。亡くなられた山根安太郎先生は、この習慣をとて喜ばれて、「さすがに女子大ですね。」とおっしゃっていられたものでした。山根先生は、翌四十一年本学の教授になられました。先生によって短大国文科、続いて開学した文学部国文学科の基礎が作られたといっても過言ではありません。私も、先生から大学教官として、

また研究者としての考え方を教えていただきました。

翌年春には、現在地に新校舎が完成しましたが、国文科と英文科だけが入りました。学校の囲りには桑島、根の谷川の川土手には、せんだん、葛、なでしこなどの木や草があって、四季おりおりの風情のあるところでした。今は川土手も改修されて、水害の心配はなくなりませんが、自然の楽しみが少なくなったようで淋しく感じられます。

クラブ活動に参加したのも楽しく思い出されます。私は、人形劇部と文芸部の顧問をしていました。人形劇部は、自分たちで苦心して人形を作り、童話などを大学祭で上演しました。近所の子どもたちもとても熱心に見に来てくれたものです。文芸部には、小説・短歌・詩を作る人がいましたが、作品の水準は、かなり高かったと思っております。今でも短歌を作り続けている人がいるはずですよ。

断片的に思い出すことは多々ありますが、不思議に嫌な事は忘れてしまっています。四十二名の皆さんは、立

派な女性に——母として、教師として、社会人として  
 になっていることと思います。

私たちの学園は、これからも校章にある鈴らんのように、また早春に咲く白梅のように、凜とした姿であってほしいと思います。そのために、私も微力を尽したいと思います。

(広島文教女子大学助教授・国文学科)

## まこととの出会い

池田 マサコ

私が三原女子師範学校に就職してまもない大正十二年頃、青年学校が設立され、男・女青年団が結成され、若い人たちの教育の充実発展に努力されていた頃だったと思います。指導員として武田先生らと共に、県下の青年学校や青年団の視察指導に出かけていました。偶々、当時の安佐郡久地村立青年学校に私が行きました。時、先生にお会いしましたが、ゆっくりとお話する機会

はありませんでした。

この頃、三原女子師範学校を出て郷里の双三郡に就職してまもなく、沼隈郡常石近くに嫁いだ山本アイさんは、当時の若い武田先生のことを次のように語ってくれました。

「武田先生とお会いしたのは県北の庄原市で、女子青年団の指導者講習会があり、寝食を共にして親しくご指導を受けましたので、深く印象に残りました。それからまもなく武田先生のご生家近くに嫁いできました。ご生家の常石造船の初代社長様や、先代の社長様に大変昵懇にしていた関係で、ミキ先生には再びご指導をいただくことになりました。先生は沼隈町が生んだ偉大な女子教育の大先輩として敬仰せられ、武田学園創設当時から現在も郷土の後輩の指導に、格別の情熱を傾けられ、学園に学んだ子女の教養の高さは、郷土の一つの誇りとなっています。先生の大らかなお人柄と、内に秘められた誠実そのものと、信念のお強さに頭が下ります。」

その後、大正から昭和十七年頃まで先生が呉市立阿賀

実科高等女学校にお勤めになっておられた当時、小学校教員検定試験制度がありましたので、先生は毎年受験生を数人お連れになって、三原女子師範学校へお出かけになりました。この時始めて親しくお会いし、語り合いました。温厚なお顔、質素な服装、礼儀正しい物腰でご挨拶されました様子は、深く脳裏に焼きついています。さすがに先生の教えを受けた受験生は、ほとんど合格し、県下の女子青年学校に就職し、現在もなお活躍している者多く、先生を慕っています。

その当時、三原女子師範学校を経て、呉の学校に勤めていました卒業生が、「武田先生は女教員のリーダーとして研究会や講習会を催され、女教員のお手本と尊敬していました。」と、力強く語ってくれました。

昭和十五年頃から戦時体制に入り、お目にかかる機会は少なくなりましたが、先生は理想の実現に七転び八起き以上のご苦労をなさいましたが、固い信念とご努力で広島文教女子大学を創立され、今日、すばらしい発展を致しました。

私は昭和三十九年三月、広島大学を停年退職しますとすぐ、武田先生が学長をしておられる広島文教女子大学に勤めさせていただくことになりました。なんとご縁の深いことでしょうか。

書道にご造詣の深い先生にお願いして、色紙に先生のお好きな字「誠」を書いていただきました。辞書を見ますと誠は「まこと」と読み、言語、性行の上に偽りないこと。公平無私で純一なこと。誠者天之道也。誠<sup>マコト</sup>、之<sup>ノ</sup>者人之道也。以上の意のとおり、先生は実に誠実なご人物で、私は一生の座右銘とし、先生と出会えたしあわせに感謝して、教えの道にいそしんでいく覚悟でおります。

(広島文教女子大学短期大学部教授・食物栄養学科)

## 根の谷川の樅の呟き

堂野 佐 俊

透明なせせらぎの根の谷川を背に、眩しいばかりの山



の縁を眼前に展開する三階の自分の研究室に案内された感激の日、昭和四十六年四月一日から、広島文教女子大学に末席をけがすこと、すでに十二年の歳月が流れた。

この間、一貫して幼児教育学科（昨年から新設の初等教育学学科にも）に所属し、その第一期生から今日に至るまで、これまでに八〇〇人を超える幼教の学生と接してきたことになる。もっとも、当初は大学・短大双方において、一般教育科目の心理学や教職科目としての教育心理学を担当していたので、本学学生のほとんどの方々と接していたようである。

“十年一昔”が解せない訳ではないが、私には、本学での生活は一向にその歴史感を意識させない。十年間は、むしろ文教を創造し基礎を組み立てつつある現実なのである。今日になっても、幼教第一期生諸姉との交流の各シーンや若さの滲み出たエピソードの数々は、つい先日の出来事としてしか実感されない。第二期生との場合も全く同様で、いわんやそれ以降の卒業生とのファイルの中味は、まさに昨日の事として、シネマスコープで鮮

明に、微細な部分まで再現できるようである。貴重な出会いに満ちたこれらのページの中では、直接クラスを担当した第三期、第五期、第八期、第十期の各諸姉には、特に迷惑をかけたが、これらの方々とのかわわりは、とりわけ強烈なレリーフとなっている。

奉職以来、幼児教育学科と並行して、一貫して学生部に所属し、多くの学生、特に学友会執行部の諸姉や各サークルの代表の方々とコミュニケーションを持つ機会も多かった。こちらの巻のページの中では、学友会が主催していた学内セミナーでの議論や、結局はそれに代るようになった新入生歓迎オリエンテーションセミナー（オリゼミ）への取り組みの変遷などは、一段と色鮮やかに再現される。特にオリゼミは、当然ながら本来のオリエンテーションの意味は失わず、人間と人間のふれ合いを通して「和の精神」の雰囲気醸成し、友好的で活発で主体性のあるキャンパスライフを創り、教育・研究の効率化を計るという意味をも含めて、私の赴任の翌年に初回を実施したので、新近感（親近感）は大きい。小河

内の野外活動センターで二群に分けて行なったこと、沼限のみろくの里で全学生・教職員が一堂に会したこと、先発隊として数日前から現地に泊り込んで準備したと、最高にすばらしいものにするために学生役員が涙ながらに必死の努力を重ねていたことなど、あれこれと試行錯誤を繰り返しながら今日まで継続してきたものだけに、余計に印象的である。

活力のある大学創りの一端としての学生部のもう一方の努力は、日常のサークル活動や学友会活動など学生生活全般の活発化に対して積極的に理解することであった。それは、学生の主体性を軽視し過保護にするという意味でなく、とかく消極的——三無主義などと呼ばれ、女子大、大学・学科の規模、学生の出身地の広範性など要因は、多々考えられた——と思われた学生全体のムードに対して、原始的かつ適切な推進力を養成すべく方向づけを援助することであった。このことが本学での生活を、有意義で青春の一頁を飾るにふさわしいものにするための一手段と考え、大学に対しては相当の無理もお願

いした。近年、僅かずつではあるが、学園全体にバイタリティの萌芽を感じるのは自分だけであろうか。

最後になったが、文教と自分の関わりを顧みる時、超大のイベントは、学長先生に我儘をお願いして、一九七五年から七六年まで、本学から初の海外研修として、米国内で研究する機会を与えていただいたことである。当時の本学の立場や状況から考えて、多大な迷惑はかけたが、自分にとっては、この契機が何にも代え難い貴重なステップになったことはまちがいない。真に、文教が自分を創ってくれたと感謝の念で一杯である。

(広島文教女子大学助教授・初等教育学科)

不思議な縁、そして出会い

秋山幹男

世の中には、まったく無関係な二つの出来事が並行して継続しているだけなのに、それらがある時から意外と不思議な結び付きをもってくることがあります。学園

(大学)と私の間にもこのことがいえるようです。

昭和二十三年、本学園は広島県可部女子専門学校として発足されました。同年私方に弟が誕生。時は流れ、昭和三十七年可部女子短期大学を新設される。同年私と三年間高校で席を同じくしたFさんが第一期生として本学へ入学。私は広島大学教育学部心理学科へ入学。昭和四十一年本学園は文学部を新設され、広島文教女子大学が誕生しました。その年私は大学院修士課程の学生となる。ここまでは、ほとんど関わりのない二つの出来事の流れました。ところが、昭和四十七年四月より本学園短期大学部に奉職させていただくことになり、幼児教育学科の専任講師として招かれたことで、時の流れを共有させていただく縁を得ました。この年も不思議な結び付きがあり、三月に結婚、四月に本校赴任という公私共に新生活のスタートが開始されたのです。

学長先生から辞令書をいただくため参上した四月一日の事は生涯忘れられません。平和公園の桜はつぼみをたくさんつけておりました。中島駅で下車し大学への道を

歩いておきますと、家々の軒下にはたくさん白い塊があるのです。傍によって見ると、何とそれは雪だったのです。桜を見、雪を顧る。この印象は今も鮮やかによみがえってきます。

以来十有余年、大先輩・同輩の諸先生方、学生諸氏、そして附属幼稚園児たちからたくさんのお事を教えていただいできております。本当に今の自分は幸せ者であると思います。このようなすばらしい人間の絆は、そう簡単には得られるものではありません。その中でも特に私にとって忘れられない思い出を、三話記させていただきます。

その一。赴任した当時私は二十八歳(ノ)、光岡始先生(本学名誉教授・絵画)は七十歳のお年でしたでしょう。先生は根の谷川の土手を一緒に歩かれながら、草花や鳥そして雲や川の流れを指さされつつ、「秋山君、これらは皆立派に生きているんだよ。自然はすてきでしょう。人生も七十を過ぎると実に楽しいものだよ。」(脚色部分多々)と話してくださいました。『生きる』という

この意味をご伝授くださったと、今も信じています。

その二。中井虎一先生（本学名誉教授・社会学）との出会いもありがたいものでした。私が中学生の頃、国語の教科書に記載されていた「人面の大岩」の話に強い感動をおぼえ、以来ずっと心の支えにしてきましたが、作者が私には不明だったのです。赴任二年目の夏、セミナーで班の学生たちにこの話をした時、先生が「それはホーソン（アメリカ）の作品です。」とお教えくださったのです。その時の喜びは大変なものでした。十五年以上も探し求めていた作者に出会えたのですから。

その三。昭和五十五年十一月十八日、武田ミキ学長先生の中国文化賞受賞祝賀会が、グランドホテルの間で催されました。その折、私は先生と握手をさせていただく栄にめぐまれたのです。教育一筋五十九年のそのお手は、本当に温かいものでした。

不思議な縁と出会いを得た私も、〃誠実と努力〃をモットーにして、人間的に成長し続けたいものと考えております。

（広島文教女子大学短期大学部助教授・幼児教育学科）

## 昭和四十七年四月のある日

田 辺 健 二

昭和四十七年四月のある日、私は本学の講師としての辞令をいただきに、横山邦治先生に伴われて学長室に参上した。私と同時に採用された先生は、他に二人おられたのだが、その時と一緒にいなかったのは、私の方に何かの事情があつて、他のお二人と共に四月一日に辞令をいただきに行けなかったせいかもしれない。その辺りの記憶はもはや定かではない。「四月のある日」としたゆえんである。

その時、学長先生に初めてお目にかかつて、さて、何を話したのだのか、これまた定かな記憶がないのは、まことにお恥ずかしい次第だが、多分建学の精神や学園訓についてのお話であつたように思う。これほどに私の健忘症はひどくなっているのである。その後、たび

たび学長先生から「建学の精神が身につけていない。」とお叱りを受けたのも、むべなるかなである。あの時からすでに十一年余りの歳月が流れてしまった。まさに、光陰矢の如く、往時茫茫である。この間、私の方はいたずらに馬齢を重ねてきたばかりであるが、本学の方は年々発展充実してきていることは周知のとおりである。

私が本学に赴任して来た当時の国文学科には、山根太郎、西谷登七郎、横山邦治、山内洋一郎の各先生方が専任でおられた。このうち、山根・西谷両先生はすでに故人となられ、山内先生は、私が赴任した翌年に奈良教育大学の方へ転出された。したがって、その時の先生方のうち残っておられるのは横山先生お一人であるから、在任期間からいえば、私は二番目の古参ということになる。現在の国文学科には、十一名の専任教員がいるから、この十年間に国文学科の教員数は倍増したわけである。他の学科もほぼ同様のことがいえるし、学生数も同じように増えている。まことに結構なことである。

当時は、全学の教員数も四十数名余りで、その人間関

係も実に和氣藹々として良い雰囲気であった。それは、規模の大きくなった今でも残っている。国文学科は殊にまとまりがよくて、ほとんど月例的に全員で盃を交わしたものである。国文学科教員の採用条件は「酒が飲めること」などと冗談をいうほどに、酒豪が揃っていた。もちろん、国文学科の教員は酒ばかり飲んでいたのでない。他学科に先駆けて学会を作り、学会誌を出しているし、研究と教育に専念してきたというまでもない。教授会も実に活発な議論の場であった。形式的な、上意下達式のそれではなく、いつも侃々諤々の議論をしたものである。ある年の入試判定会議のときは、朝から始めて深更十二時すぎにまでおよび、ついには貧血のため倒れる先生も出るといふ始末であった。能率が悪いといえればそのとおりだが、能率のみを大事にしがちな現代において、むしろ貴重な雰囲気である。

そういう民主的な雰囲気は、これからも大事にしていきたいと思う。もちろん問題点も数多くある。しかし、他の大学にはない良い点が多いのもまた確かである。そ

れをさらに大きなものにしていきたいものである。

(広島文教女子大学教授・国文学科)

## ポプラの木

土屋 孝子

ついこの間まで、朽ちてポロポロになった木片の幾つかが園庭にころがっていた。園児たちがなかなか手放なそうとしなかった遊び道具の残骸である。

直径五十センチもあった大木をいくつかの輪切りにしただけのものだったが、子どもたちはそれを並べたり、ころがしたり、ママゴト台にしてみたり、高い方の鉄棒のふみ台にしては遊んでいた。

それがいつの間にか形もわからなくなり、さわるとポロポロと欠けていった。そして、とうとう幼児が片手でもてる位に小さくなって、庭においてあると、ゴミと間違えてしまいそうだった。

「もう焼こう」と、決意して何度か焼却場に運ぶのだ

が、何故か、火の中におち込めなくて側においておく。すると、またしても子どもたちはもち出して遊んでいた。

その度に、「あーあ、あの木は又、生きのびた。運の強い木だこと」と、ほっとしては園庭が汚れるのを見逃してしまふ。

こういうことを何度かくりかえしていたが、この三月やっと処分してしまった。

この木こそ、——なつかしい元の附属高校にあったポプラの木だったのだ。

そのポプラの木——、それは広島文教女子大学附属高等学校が現在の安佐市民病院の所にあった頃、正門の左側にそびえていた。

昭和五十二年の附属高校移転の時、切り倒されていた幹三本を幼稚園にいただいたものだった。この木は、五年間も遊具として子どもたちをよろこばせてくれた他にも、私にとって忘れることのない思い出の木でもある。

この木に初めて出会ったのは昭和四十六年の春、付属幼稚園の誕生の年だった。

創立期の不安に頭をかかえていた頃、あの木は新芽を  
吹き出して、まぶしい光をまきちらしていた。この葉が  
大きくなる迄に、鯉のぼりの用意を、七夕の準備をと、  
いっしょに夢を育ませてもらった。大きくなった葉が風  
にざわめく頃は、安らぎをもらったし、葉が散ってしま  
った冬の木からは、身のひきしまるような、きびしさ  
とか、勇氣のようなものをもらったように思う。

冷たい風の中を凜として立っている風景は、いまでも  
私の中にしみ込んでいる。私はこの冬の裸木が好きだっ  
た。太い幹から無数の小枝が天に向って真直ぐ伸びてい  
るのは実にいい。

帰る途中、丁度夕焼けとぶつかった時などのシルエッ  
トは格別だった。美しい——思わず立ち止って息をのむ。  
あの頃、毎日ポプラ並木を仰ぎみて通うのがたのしみ  
の一つになっていた。

ポプラがこんなにさまざまな顔をもっていることに気  
付かせてもらった七年間と、園児たちをたっぷり遊ばせ  
てもらった五年間に心から謝して、学園創立三十五周年

を祝したい。  
  
(広島文教女子大学付属幼稚園主任)